



第2回年会を2008年5月9-10日(金-土)に三島で行います

- 第2回年会を、国立遺伝学研究所 佐々木裕之教授を年会長として、静岡県三島市東レ研修センターにて行うことが決まりました。
- 第1回年会の熱気を受け、益々盛り上げていきたいと思えます。日程をご予定下さい。



- 口演・ポスター等の時間配分など、年会の構成は、今後詰めていきます。ご意見を歓迎いたしますので、お気軽に、事務局、佐々木年会長にお寄せ下さい。



第1回年会での話題 No.2 田嶋年会長所感

第1回年会を終えて

大阪大学蛋白質研究所 田嶋 正二

初めての研究会年會を300名以上の皆様の参加で開催できたこと、しかも参加いただいた皆様が、特にポスター会場で、ディスカッションを活発にされている様子を拝見して、心の中で万歳を叫びました。招待講演には、「インプリント型のX染色体不活性化」を発見された高木信夫先生（北星学園大）と position effect variegation とクロマチンリモデリングの領域でユニークな仕事をされている広瀬進先生（国立遺伝学研究所）をお迎えしましたが、お二人による独創性の高い仕事は、間違いなく若い研究者の皆さんに「何か」を伝えたと確信いたします。もうひと方、今春奈良先端技術大学院大学を定年退職された佐野浩先生にも、植物のDNAメチルトランスフェラーゼとメチル化についてお話をいただく予定でしたが、スウェーデンに長期出張とのことでご講演いただけなかったのが残念です。

一般の口演発表では、それぞれの分野の第一線で長い間ご活躍の方々に、その分野のオーバービューを含めてお話いただくようお願いいたしました。最新のデータはあまりゆっくりお話いただけなかったと思いますが、これは私の責任です。少し残念なのは、口演発表いただく方々をもう少し増やして、一般の申し込み演題からも拾い上げることと、ポスター討論の時間をもう少し長くとることができなかったことです。

一方、嬉しい誤算だったのは、年會に参加した半数の方々が懇親會に参加して下さったことです。懇親會会場がどうしても150名以上収容できないとのことで、当日懇親會に参加を希望された多くの皆様を断らざるをえなかったことが心残りです。私たちが目指している研究会は、異分野に基盤を置く研究者の方々を、エピジェネティクス研究という共通項で繋げ、ここから新しい研究の芽を生む場を創るというものです。このためには、懇親會はなくてはならない場であると考えます。その意味で、参加をお断りしなければならなかったことは悔やまれます。

最後に、第1回目にもかかわらず會の運営が比較的スムーズに行えたのは、参加いただいた皆様のご協力もありますが、組織委員会と研究室の同僚達の協力の賜物であると、手前味噌ですが感謝しています。今年の會の盛り上がりを考えますと、来年以降はさらに参加人数も増え、會はますます大きくなることが予想されます。會が大きくなることは、もちろん大歓迎なのですが、今後とも年會での口演は1会場を死守していただきたいと思えます。会場を複数に分けて分野ごとに細分化したのでは、私たちが目指しているエピジェネティクス研究会の「意見交換の場」としての意味が薄れてしまうことを恐れるからです。

日本エピジェネティクス研究会事務局
東京医科歯科大学 歯学総合研究科 分子腫瘍医学分野内
庶務担当幹事 湯浅保仁、担当：小澤良子
住所：郵便番号 113-8519 東京都文京区湯島 1-5-45
TEL:03-5803-5184; E-mail: jse.monc@tmd.ac.jp